中国語（武漢方言）における名詞句と名詞句をつなぐ“的”

許　慧

はじめに

中国語（武漢方言）においては、名詞句と名詞句を結びつけるのに“的”（日本語の「の」にあたる）をよく用いるが、用いないことも可能である。（1）の例では、“的”があってもなくても成り立つ。

（1）　他　是　我　(的)　老师。（彼は私の先生です。）
　　彼　です　私　の　先生

（2）のように、“的”を用いなければならない例も少なくない。

（2）　a　这　是　小明　的　书。（これは小明の本です。）
　　これ　です　小明　の　本
　　b　？？这　是　小明　书。（これは小明の本です。）
　　これ　です　小明　本

そのほか、“的”を用いるより用いないほうが自然な例もある。

（3）　a　？？这里　是　我们　的　班。（ここは私たちのクラスです。）
　　ここ　です　私たち　の　クラス
　　b　这里　是　我们　班。（ここは私たちのクラスです。）
　　ここ　です　私たち　クラス

“的”については、さまざまな観点からの研究がありうるが、本稿では、中国語（武漢方言）において、上のような文について、一体どういう状況で“的”を用いなければならないのか、どういう状況で“的”を用いても用いなくてもよいのか、また、どういう状況で“的”を用いてはいけないのか、という問題に取り組む。なお、武漢方言における“的”は北京官話と発音以外はあまり違わないので、北京官話における“的”を扱った先行研究を参考にしながら、考察を行う。

1．フレーズレベルでの考察

まず、フレーズレベルから考察を行う。フレーズとは単語と単語の組み合わせであるが、全く無限定にフレーズを考えるのには若干抵抗がある。本稿では、例えば、ある子供が絵を描く時あるいは作文を書く時に付けるタイトルのようなものをフレーズと定義する。

絵あるいは作文の題としては、「人称代名詞＋人」の場合、（4）と（5）の例のように、人称代名詞“我”（私）が“的”を伴うのが一般的である。

（4）　我　的　爸爸　（私の父親）

私 の 父親

(5) 我 的 朋友 (私の友達)

私 の 友達

"我"(私)以外の人称代名詞"你"(あなた)や"他"(彼)などを用いた絵や作文の題は極めてあらわれにくいが、やはり"的"を用いなければならないと考えられる。

(6) 你 的 老师 (あなたの先生)

あなた の 先生

(7) 他 的 仇人 (彼の仇)

彼 の 仇

次に、人称代名詞が二つある例を見てみる。

(8) a 我 和 他 的 朋友 (私と彼の友達)

私 と 彼 の 友達

b *我 的 和 他 的 朋友 (私と彼の友達)

私 の と 彼 の 友達

例(8)のaにおいて、"他"(彼)の後には"的"があるが、"我"(私)の後にはない。このような表現形式は「私と彼が共有する友達」と、「私プラス彼の友達」という二つの意味をあらわしうる。なお、前者の意味をあらわすのに、bのようには言えない。つまり二つの人称代名詞のそれぞれの後に同時に"的"を付けることができない。

絵あるいは作文にタイトルをつける時には、「人称代名詞+体の一部」の場合も"的"を用いなければならない。

(9) 我 的 头 (私の頭)

私 の 頭

(10) 他 的 眼睛 (彼の目)

彼 の 目

「人称代名詞+物」の場合も、やはり"的"を用いなくてはならない。

(11) 你 的 眼镜 (あなたの眼鏡)

あなた の 眼鏡

(12) 他 的 帽子 (彼の帽子)

彼 の 帽子

「人称代名詞+動物」の場合も、やはり"的"を用いなければならない。

(13) 我 的 金鱼 (私の金魚)

私 の 金魚

(14) 你 的 牛 (あなたの牛)

あなた の 牛

さらに、人称代名詞を固有名詞、一般名詞に置き換えた場合も、やはり"的"を用いなくてはならない。

(15) 小明 的 妈妈 (小明の母親)

小明 の 母親

(16) 老师 的 书 （先生の本）
先生 の 本

北京官話でも同じはずだが、朱德熙（1982）や吕叔湘（1980）、勝川（2001）などには、このようなフレーズレベルで"的"を用いな（くてよ）い例が挙がっている[1]。方言による違いというより、これらの先行研究では、孤立的に発話されるものと、そうでなく文中に用いられるものとをはっきり区別していないのではないかと思われる。

2．文レベルでの考察

文レベルでの考察では、主語となる場合と目的語となる場合とを分けて行う。

2.1 主語となる場合

2.1.1 人称代名詞＋X

まず、「人称代名詞＋人」の場合、"的"を伴うかどうかについて考察する。

(17) a ?我 的 爸爸 是 医生。（私の父親は医者です。）
私 の 父親 です 医者
b 我 爸爸 是 医生。 （私の父親は医者です。）
私 父親 です 医者

(18) a ?我 的 姐姐 从 北京 回 来 了。（私の姉が北京から帰ってきた。）
私 の 姉 から 北京 帰る 来る た
b 我 姐姐 从 北京 回 来 了。 （私の姉が北京から帰ってきた。）
私 姉 から 北京 帰る 来る た

(17)、(18) の例で、"爸爸"（父親）、"姐姐"（姉）は親族をあらわす一般名詞（以下「親族名詞」）である。この場合、人称代名詞が"的"を伴わないほうが自然である。

(19) 他 （的） 老乡 是 那 个 戴 帽子 的。
彼 の 同郷人 です あれ 量詞 かぶる 帽子 の
（彼の同郷人はあの帽子をかぶっている人です。）

(20) 你 （的） 老师 是 哪个 啊？ （あなたの先生は誰ですか？）
あなた の 先生 です 誰 語気詞

(19)、(20) の例では、"老乡"（同郷人）、"老师"（先生）は親族以外の人で、普通の人間関係にある人といえる。この場合、"的"があってもなくてもよい。では、親族以外の人で、そして全く親しくない人である場合はどうであろうか。

(21) a 他 的 死对头 来 了。（彼の敵が来た。）
彼 の 敵 来る た
b ?他 死对头 来 了。 （彼の敵が来た。）
彼 敵 来る た

(22) a 我 的 对手 蛮 有 实力。（私のライバルは実力がある。）
私 の ライバル とても ある 実力
b ?我 对手 蛮 有 实力。（私のライバルは実力がある。）

私　ライバル　とても　ある　実力

(21)、(22) の例においては、"死对头"（敵）、"对手"（ライバル）は人称代名詞のあらわす人にとって親しくない人と一応いえる。(17) と (18) の例と逆に、人称代名詞が"的"を伴ったほうが自然である。

次に、「人称代名詞＋体の一部」の場合の"的"の使用不使用について考察する。

(23) 我 (的) 头 蛮 疼。 (私の頭がとても痛い。)
私 の 頭 とても 痛い

(23) の例においては、"的"があってもなくてもよい。しかし、"的"の使用不使用によって、文の構造が変わることに注意されたい。人称代名詞が"的"を伴った文においては、名詞フレーズ"我的头"（私の頭）が主語となっているが、"的"を伴わない文においては、人称代名詞"我"（私）が主語となっている。日本語に訳せば「私は頭がとても痛い」といった意味になる。

(24) 我 (的) 钱包 被 偷 了。 (私の財布が盗まれた。)
私 の 財布 被 盗む た

(25) 我 (的) 狗子 不 见 了。 (私の犬が見つからなかった。)
私 の 犬 ない 見つかる た

(24) は「人称代名詞＋物」の例であり、(25) は「人称代名詞＋動物」の例である。両方の例においては、"的"があってもなくてもよい。ただし、「人称代名詞＋体の一部」の場合と同様に、"的"の有無によって、文の主語が変わる。例えば、(24) は、"的"がないと、「私は財布を盗まれた」といった意味になる。

2.1.2 固有名詞＋X

まず、「固有名詞＋人」の場合、"的"を伴うかどうかについて考察する。

(26) a 小明 的 叔叔 来 了。 (小明のおじさんが来た。)
小明 の おじさん 来る た

b 小明 叔叔 来 了。 (小明おじさん／小明のおじさんが来た。)
小明 おじさん 来る た

(26) の例において、固有名詞"小明"と親族名詞"叔叔"（おじさん）の間に、"的"があってもなくてもよい。しかし、中国語では、固有名詞が"的"を伴わずに直接に親族名詞と結合する表現形式は通常「呼称関係」と理解される。従って、"小明叔叔"は通常「小明おじさん」となるのである。"小明"が女性である可能性もあり、そしてその場合は現実問題として"小明叔叔"は"小明的叔叔"（小明のおじさん）でしかありえないわけだが、通常は"小明"を男性と判断する。では、親族名詞が"妈妈"（お母さん）の場合はどうであろうか？ (27) の例を見よう。

(27) 小明 (的) 妈妈 呢？ (小明のお母さんは？)
小明 の お母さん 語気詞

(27) の例では、"的"がないと、ちょっと変な感じになる。通常男性と判断される"小明"と女性である"妈妈"（お母さん）が呼称関係を構成する可能性は低く、かつ、母親の名前を"妈妈"の前につけることはあまりないが、"小明妈妈"にまず成立する読みは呼称関係である。要するに、「固有名詞＋親族名詞」という表現形式には第一義的に呼称関係が成立している[2]。従って、「固有名詞＋

親族名詞」の場合は、所有の意味をあらわす際、“的”を用いたほうがよいのである[3]。こうしたことは、「固有名詞＋親族名詞」がどこにあらわれようといえることであり、以下ではその記述を省略する。

次に、「固有名詞＋体の一部・物・動物」の例を見てみる。

(28) 小明 (的) 头 蛮 疼。 (小明の頭がとても痛い。)
小明 の 頭 とても 痛い

(29) 小明 (的) 钱包 被 偷 了。 (小明の財布が盗まれた。)
小明 の 財布 被 盗む た

(30) 小明 (的) 狗子 不 见 了。 (小明の犬が見つからなかった。)
小明 の 犬 ない 見つかる た

上記の例において、“的”があってもなくてもよい。ただし、人称代名詞の場合と同様に、“的”の有無によって、意味の違いが出てくる。例えば、(29) は、“的”がないと、「小明は財布を盗まれた」といった意味になる。

2.1.3 一般名詞＋X

(31) a 姐姐 的 同学 到 我 屋里 来 了。(姉の同級生が私の家に来た。)
姉 の 同級生 至る 私 家 来る た

b ？姐姐 同学 到 我 屋里 来 了。(姉の同級生が私の家に来た。)
姉 同級生 至る 私 家 来る た

(31) の例では、一般名詞“姐姐”(姉)、“同学”(同級生) の間に、“的”を置いたほうが自然である。ただし、(32) の例を見よう。

(32) 姐姐 同学 的 朋友 也 到 我 屋里 来 了。
姉 同級生 の 友達 も 至る 私 家 来る た
(姉の同級生の友達も私の家に来た。)

(32) の例では、一般名詞“同学”(同級生) と“朋友”(友達) の間のみに“的”が用いられている。日本語の場合、「姉の同級生の友達」における二つの「の」はいずれも落とせないが、中国語は二つの“的”のうちの最初の一つを落とすことが可能である。可能であるというよりむしろ好まれているといったほうが当たっていよう。

次に、「一般名詞＋体の一部・物・動物」の場合、“的”の使用不使用について考察する。

(33) 叔叔 (的) 头 蛮 疼。(おじさんの頭がとても痛い。)
おじさん の 頭 とても 痛い

(34) 哥哥 (的) 钱包 被 偷 了。 (兄の財布が盗まれた。)
兄 の 財布 被 盗む た

(35) 叔叔 (的) 狗子 不 见 了。(おじさんの犬が見つからなかった。)
おじさん の 犬 ない 見つかる た

上記の例において、やはり“的”があってもなくてもよい。ただし、人称代名詞、固有名詞の場合と同様に、“的”の使用不使用によって、意味の違いが出てくる。例えば、(34) は、“的”がないと、「兄は財布を盗まれた」といった意味である。

2.1.4 Y＋抽象名詞

(36) a 我 的 理想 是 当 老师。 (私の夢は先生になることです。)
私 の 夢 です なる 先生

b ？？我 理想 是 当 老师。 (私の夢は先生になることです。)
私 夢 です なる 先生

(37) a 老板 的 意见 不 得 不 听。 (ボスの意見は聞かざるを得ない。)
ボス の 意見 ない 得 ない 聞く

b ？？老板 意见 不 得 不 听。 (ボスの意見は聞かざるを得ない。)
ボス 意見 ない 得 ない 聞く

(36) と (37) の例では、"的" を用いないと、言いにくくなる。特に (37) において、"的" が省略されたら、「ボスがほかの誰かの意見を聞かなければならない」というような誤解を招く可能性がある。

2.1.5 まとめ

主語となる場合の例をまとめると、多くの場合は "的" があってもなくてもよい。しかし、"的" を伴うか否かによって、意味の違いが出てくる場合がある。また、「人称代名詞＋人」の場合、「人」が親族であれば、"的" を用いない傾向がある。親族以外の人で、普通の人間関係にある人である場合は "的" があってもなくてもよく、全く親しくない人である場合は "的" を用いたほうがよい。「固有名詞＋親族名詞」の場合は、"的" を伴わない表現形式が通常「呼称関係」と捉えられることに注意されたい。

2.2 目的語となる場合

以下では、目的語となる場合を見るが、"(不) 是" の後の名詞についても、また、"把" などの後の名詞についても一応「目的語」(「賓語」) として扱う。

2.2.1 (不) 是＋NP

2.2.1.1 人称代名詞＋X

まず、「人称代名詞＋人」の場合、"的" を伴うか否かについて考察する。

(38) a ？这 是 我 的 爸爸。 (こちらは私の父親です。)
これ です 私 の 父親

b 这 是 我 爸爸。 (こちらは私の父親です。)
これ です 私 父親

(39) 这 是 我 (的) 老乡。 (こちらは私の同郷人です。)
これ です 私 の 同郷人

(40) a 他 是 我 的 情敌。 (彼は私の恋敵です。)
彼 です 私 の 恋敵

b ？他 是 我 情敌。 (彼は私の恋敵です。)
彼 です 私 恋敵

(38) の例は、道で出会った知り合いの人に自分の親族を紹介するような場合である[1]。この場合、やはり“的”を用いないほうが自然である。(39) の例は親族以外の人で、普通の人間関係にある人を紹介する例である。この場合、人称代名詞“我”（私）が“的”を伴う場合と、伴わない場合がある。(40) の例において、“情敌”（恋敵）は“我”（私）にとって親しくない人と言える。(38) の例と逆で、人称代名詞“我”（私）が“的”を伴うほうが自然である。

(41) a 他 不 是 我 的 对手。
彼 ない です 私 の ライバル
（彼は私のライバルではない。／彼は私に勝てるようなレベルではない。）
b 他 不 是 我 对手。 （彼は私に勝てるようなレベルではない。）
彼 ない です 私 ライバル

(41) において、“对手”（ライバル）は“我”（私）にとって親しい関係を持つ人とは言えないが、人称代名詞“我”（私）の後に“的”があってもなくてもよい。これは例外だと思われるかもしれないが、実はそうでもない。なぜならば、“的”を伴わない文が純粋の所有関係をあらわさなくなったからである。“的”を伴ったaの文は「彼は私のライバルではない」と、「彼は私に勝てるようなレベルではない」という二つの意味をあらわしうることに対して、“的”を伴わないbの文は後者の意味しかあらわしえない。要するに、「所有」の意味をあらわすのに、やはり“的”を用いなければならないということである。

次に、「人称代名詞＋物」の場合、“的”を伴うか否かについて考察する。

(42) a 那 是 我 的 书。 （あれは私の本ではない。）
あれ です 私 の 本
b ？？那 是 我 书。 （あれは私の本です。）
あれ です 私 本

(43) a 那 不 是 我 的 书。 （あれは私の本ではない。）
あれ ない です 私 の 本
b ？那 不 是 我 书。 （あれは私の本ではない。）
あれ ない です 私 本

上記の例では、人称代名詞“我”（私）と物をあらわす一般名詞“书”（本）の間に“的”を置いたほうが自然であるが、面白いことに、筆者の語感では、“是＋NP”の文と“不是＋NP”の文に“的”を伴うか否かについて微妙な違いが出る。肯定文においては、“的”を用いないと成立しにくいが、否定文においては、“的”を用いなくてもそれほど違和感がない。（こうしたことを、？？と？の区別で表現した。）

次に、人称代名詞が二音節である場合を見てみる。

(44) 这里 是 我们 (的) 学校。 （ここは私たちの学校です。）
ここ です 私たち の 学校

(44) の例では、人称代名詞“我们”（私たち）と一般名詞“学校”（学校）の間に、“的”があってもなくてもよい。それは、人称代名詞“我们”（私たち）が単音節でなく、二音節であることが関係していると考えられる。そのことは、人称代名詞“我们”（私たち）を“我”（私）に置き換えた (45) の例で検証することができる。

(45) a 这里 是 我 的 学校。 (ここは私の学校です。)
ここ です 私 の 学校
b ??这里 是 我 学校。 (ここは私の学校です。)
ここ です 私 学校

(45) の例は、学生がこういうのは不自然であるので、これを校長先生やオーナーの発話と想定する。この例においては、やはり人称代名詞"我"(私)と一般名詞"学校"(学校)の間に"的"を置かないと不自然である。では、人称代名詞と一般名詞は両方とも単音節の場合はどうなるのか、下記の例を見てみる。

(46) a 这 是 我 的 厂。 (これは私の工場です。)
これ です 私 の 工場
b ??这 是 我 厂。 (これは私の工場です。)
これ です 私 工場

(46) では、人称代名詞と一般名詞との間に"的"を置いたほうがよい。

次に、人称代名詞が二音節で、一般名詞が一音節の例を見よ。

(47) a ??这里 是 我们 的 科。 (ここは私たちの課です。)
ここ です 私たち の 課
b 这里 是 我们 科。 (ここは私たちの課です。)
ここ です 私たち 課

(47) の例では、人称代名詞"我们"(私たち)と一般名詞"科"(課)の間に"的"を用いるほうはあまりあらわれない。それは、一般名詞"科"(課)は二音節でなく単音節であることが関係した現象と考えられる。そのことは、一般名詞"科"(課)を二音節の"科室"(課)に置き換えた(48)の例で検証することができる。

(48) 这里 是 我们 (的) 科室。 (ここは私たちの課です。)
ここ です 私たち の 課

(48) の例においては、人称代名詞"我们"(私たち)と一般名詞"科室"(課)の間に"的"があってもなくてもよい。要するに、中心語が所属機関をあらわす一般名詞である場合は、人称代名詞が一音節であるならば、"的"を用いなければならないが、人称代名詞と一般名詞が両方とも二音節である場合"的"があってもなくてもよく、人称代名詞のみが二音節の場合はないほうがよい。ただし、"的"を伴うか否かによって、ニュアンスの違いが生じる場合がある[5]。奇妙に思われるかもしれないが、筆者の語感では、そうである。

次に、「人称代名詞+体の一部・動物」の例を見よう。

(49) a 你 踩 的 是 我 的 脚。(あなたが踏んだのは私の足です。)
あなた 踏む の です 私 の 足
b ?你 踩 的 是 我 脚。(あなたが踏んだのは私の足です。)
あなた 踏む の です 私 足

(50) a 那 是 他 的 牛。 (あれは彼の牛です。)
あれ です 彼 の 牛
b ??那 是 他 牛。 (あれは彼の牛です。)

あれ　です　　彼　牛

上記の例に見るように、中心語が体の一部、動物をあらわす一般名詞である場合、"的"を用いたほうがよい。

2.2.1.2　固有名詞＋X

(51)　a　他　是　小明　的　女朋友。　（彼は小明のカールフレンドです。）
　　彼　です　小明　の　ガールフレンド
　　b　？他　是　小明　女朋友。　（彼は小明のカールフレンドです。）
　　彼　です　小明　ガールフレンド

(52)　a　你　踩　的　是　小明　的　脚。（あなたが踏んだのは小明の足です。）
　　あなた　踏む　の　です　小明　の　足
　　b　？你　踩　的　是　小明　脚。（あなたが踏んだのは小明の足です。）
　　あなた　踏む　の　です　小明　足

(53)　a　桌子　高头　的　那　本　是　小明　的　书。
　　机　上　の　あれ　量詞　です　小明　の　本
　　（机の上のあの本は小明の本です。）
　　b　？？桌子　高头　的　那　本　是　小明　书。
　　机　上　の　あれ　量詞　です　小明　本
　　（机の上のあの本は小明の本です。）

(54)　a　他　牵　出　来　的　是　小明　的　马。
　　彼　引っ張る　出る　来る　の　です　小明　の　馬
　　（彼が引っ張って出てきたのは小明の馬です。）
　　b　？？他　牵　出　来　的　是　小明　马。
　　彼　引っ張る　出る　来る　の　です　小明　馬
　　（彼が引っ張って出てきたのは小明の馬です。）

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞の場合も、"的"を用いたほうがよい。

2.2.1.3　一般名詞＋X

(55)　a　他　是　叔叔　的　朋友。（彼はおじさんの友達です。）
　　彼　です　おじさん　の　友達
　　b　？他　是　叔叔　朋友。　（彼はおじさんの友達です。）
　　彼　です　おじさん　友達

(56)　a　你　踩　的　是　姐姐　的　脚。
　　あなた　踏む　の　です　お姉さん　の　足
　　（あなたが踏んだのはお姉さんの足です。）
　　b　？你　踩　的　是　姐姐　脚。
　　あなた　踏む　の　です　お姉さん　足
　　（あなたが踏んだのはお姉さんの足です。）

(57) a 这 不 是 哥哥 的 书包。(これはお兄さんのかばんではない。)
これ ない です お兄さん の かばん
b ?这 不 是 哥哥 书包。(これはお兄さんのかばんではない。)
これ ない です お兄さん かばん

(58) a 门 口 的 是 爷爷 的 猫子。
ドア 口 の です おじいさん の 猫
(門口にいるのはおじいさんの猫です。)
b ??门 口 的 是 爷爷 猫子。
ドア 口 の です おじいさん 猫
(門口にいるのはおじいさんの猫です。)

上記の例に見るように、前の名詞が一般名詞の場合も、"的"があったほうがよい。

2.2.1.4 Y＋抽象名詞

(59) a 当 老师 是 我 的 理想。(先生になるのは私の夢です。)
なる 先生 です 私 の 夢
b *当 老师 是 我 理想。(先生になるのは私の夢です。)
なる 先生 です 私 夢

(60) a 这 是 小明 的 意见，不 是 我 的 意见。
これ です 小明 の 意見 ない です 私 の 意見
(これは小明の意見であり、私の意見ではない。)
b *这 是 小明 意见，不 是 我 意见。
これ です 小明 意見 ない です 私 意見
(これは小明の意見であり、私の意見ではない。)

上記の例に見るように、"Y＋抽象名詞"の場合、"的"を用いなければならない。

2.2.1.5 まとめ

"(不) 是＋NP"の場合の例をまとめると、所有関係をあらわすのに多くの場合は"的"を用いたほうが自然である。また、「人称代名詞＋人」の場合、NPが主語となる文と同じ傾向が見られた(2.1.1参考)。「人称代名詞＋物」の場合も一般に"的"を用いなければならないが、中心語が所属機関をあらわす一般名詞の場合は、人称代名詞と一般名詞が両方とも二音節であるならば、"的"があってもなくてもよく、人称代名詞のみが二音節の場合は、ないほうがよい。なお、"是＋NP"の文と"不是＋NP"の文は"的"を伴うか否かについて微妙な違いが出る。特に「人称代名詞＋物」の場合、前者の文は"的"を用いないと成立しにくいことに対して、後者の文は"的"を用いなくてもそれほど違和感がない。

2.2.2 動詞＋NP

2.2.2.1 人称代名詞＋X

まず、「人称代名詞＋人」の場合、"的"を伴うかどうかについて考察する。

(61) a ?他 打 了 我 的 弟弟。 (彼は私の弟を殴った。)
彼 殴る た 私 の 弟
b 他 打 了 我 弟弟。 (彼は私の弟を殴った。)
彼 殴る た 私 弟
(62) 他 打 了 我 (的) 同学。 (彼は私の同級生を殴った。)
彼 殴る た 私 の 同級生
(63) a 他 打 了 我 的 情敌。 (彼は私の恋敵を殴った。)
彼 殴る た 私 の 恋敵
b ?他 打 了 我 情敌。 (彼は私の恋敵を殴った。)
彼 殴る た 私 恋敵

上記の例においては、"(不) 是＋NP" で考察した結果と同様に、「人」が親族であれば、人称代名詞は"的"を伴わない。親族以外の人で、普通の関係にある人である場合は"的"があってもなくてもよく、全く親しくない人である場合は"的"があったほうがよい。

(64) a 他 拍 了 拍 我 的 肩膀。 (彼は私の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 私 の 肩
b ?他 拍 了 拍 我 肩膀。 (彼は私の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 私 肩
(65) a 他 搞 丢 了 我 的 书。 (彼は私の本を失くした。)
彼 する 失くす た 私 の 本
b ??他 搞 丢 了 我 书。 (彼は私の本を失くした。)
彼 する 失くす た 私 本
(66) a 我 看 到 了 他 的 狗子。 (私は彼の犬を見た。)
私 見る 至る た 彼 の 犬
b ??我 看 到 了 他 狗子。 (私は彼の犬を見た。)
私 見る 至る た 彼 犬

上記の例に見るように、中心語が体の一部や物、動物をあらわす一般名詞である場合、"的"があったほうがよい。

2.2.2.2 固有名詞＋X

(67) a 他 打 了 小明 的 情敌。 (彼は小明の恋敵を殴った。)
彼 殴る た 小明 の 恋敵
b ?他 打 了 小明 情敌。 (彼は小明の恋敵を殴った。)
彼 殴る た 小明 恋敵
(68) a 他 拍 了 拍 小明 的 肩膀。 (彼は小明の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 小明 の 肩
b ?他 拍 了 拍 小明 肩膀。 (彼は小明の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 小明 肩

(69) a 他 搞 丢 了 小明 的 书。(彼は小明の本を失くした。)
彼 する 失くす た 小明 の 本
b ??他 搞 丢 了 小明 书。 (彼は小明の本を失くした。)
彼 する 失くす た 小明 本

(70) a 我 看 到 了 小明 的 狗子。 (私は小明の犬を見た。)
私 見る 至る た 小明 の 犬
b ??我 看 到 了 小明 狗子。 (私は彼の犬を見た。)
私 見る 至る た 小明 犬

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞の場合も、やはり"的"があったほうが自然である。

2.2.2.3 一般名詞＋X

(71) a 他 打 了 哥哥 的 朋友。 (彼は兄の友達を殴った。)
彼 殴る た 兄 の 友達
b ?他 打 了 哥哥 朋友。 (彼は兄の友達を殴った。)
彼 殴る た 兄 友達

(72) a 他 拍 了 拍 同学 的 肩膀。(彼は同級生の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 同級生 の 肩
b ?他 拍 了 拍 同学 肩膀。 (彼は同級生の肩を叩いた。)
彼 叩く た 叩く 同級生 肩

(73) a 他 搞 丢 了 哥哥 的 书。(彼は兄の本を失くした。)
彼 する 失くす た 兄 の 本
b ??他 搞 丢 了 哥哥 书。 (彼は兄の本を失くした。)
彼 する 失くす た 兄 本

(74) a 我 看 到 了 同学 的 狗子。(私は同級生の犬を見た。)
私 見る 至る た 同級生 の 犬
b ??我 看 到 了 同学 狗子。(私は同級生の犬を見た。)
私 見る 至る た 同級生 犬

前の名詞が一般名詞の場合も、やはり"的"があったほうがよい。

2.2.2.4 まとめ

"動詞＋NP"の文においての考察をまとめると、"(不) 是＋NP"の文と同様に、多くの場合は"的"を用いたほうが自然である。また、「人称代名詞＋人」の場合、NPが主語となる文と同じ傾向が見られた (2.1.1参考)。

2.2.3 把＋NP

2.2.3.1 人称代名詞＋X

まず、「人称代名詞＋人」の場合、"的"を伴うか否かについて考察する。

(75) a ?把 我 的 爸爸 喊 过 来。（私のお父さんを呼んできて。）
把 私 の お父さん 呼ぶ 通る 来る
b 把 我 爸爸 喊 过 来。（私のお父さんを呼んできて。）
把 私 お父さん 呼ぶ 通る 来る
(76) 把 你 (的) 同事 喊 过 来。（あなたの同僚を呼んできて。）
把 あなた の 同僚 呼ぶ 通る 来る
(77) a 把 我 的 死对头 喊 过 来。（私の敵を呼んできて。）
把 私 の 敵 呼ぶ 通る 来る
b ?把 我 死对头 喊 过 来。（私の敵を呼んできて。）
把 私 敵 呼ぶ 通る 来る

上記の例においては、“(不) 是＋NP”で考察した結果と同様に、「人」が親族であれば、人称代名詞は“的”を伴わない。親族以外の人で、普通の関係にある人である場合は“的”があってもなくてもよく、全く親しくない人である場合は“的”があったほうがよい。

(78) a ??把 他 的 隔壁 的 喊 过 来。(彼の隣に住んでいる人を呼んできて。)
把 彼 の 隣 の 呼ぶ 通る 来る
b 把 他 隔壁 的 喊 过 来。(彼の隣に住んでいる人を呼んできて。)
把 彼 隣 の 呼ぶ 通る 来る

(78) の例で、“隔壁的”（隣に住んでいる人）は“他”にとって普通の人間関係を持つ人である。本来“的”があってもなくてもよいはずなのに、“的”を用いるとおかしくなるのは“隔壁的”（隣に住んでいる人）がいわゆる「的フレーズ」であるからであろう[6]。

(79) 他 把 我 (的) 脚 踩 了。（彼は私の足を踏んだ。）
彼 把 私 の 足 踏む た

(79) の例に見るように、人称代名詞“我”と体の一部をあらわす一般名詞“脚”（足）の間に“的”があってもなくてもよい。

(80) 小明 把 我 (的) 电脑 修 好 了。
小明 把 私 の コンピュータ 直す いい た
(小明は私のコンピュータを直した。)

(80) に見るように、人称代名詞と物をあらわす一般名詞“电脑”（コンピュータ）の間に“的”があってもなくてもよい。

(81) 把 我 (的) 马 牵 出 来。（私の馬を連れ出して。）
把 私 の 馬 引っ張る 出る 来る

(81) の例に見るように、人称代名詞“我”と動物をあらわす一般名詞“马”（馬）の間に“的”があってもなくてもよい。

2.2.3.2 固有名詞＋X

(82) a 把 小明 的 朋友 喊 过 来。（小明の友達を呼んできて。）
把 小明 の 友達 呼ぶ 通る 来る
b ?把 小明 朋友 喊 过 来。（小明の友達を呼んできて。）

把 小明 友達 呼ぶ 通る 来る

(83) 他 把 小明 (的) 头 闯 了。 (彼は小明の頭をぶつけた。)
彼 把 小明 の 頭 ぶつける た

(84) 把 小明 (的) 笔 拿 过 来。 (小明のペンを持ってきて。)
把 小明 の ペン 持つ 通る 来る

(85) 这 个 人 把 小明 (的) 牛 偷 了。(この人は小明の牛を盗んだ。)
これ 量詞 人 把 小明 の 牛 盗む た

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合は、"的"を用いたほうが自然であるが、中心語が体の一部や物、動物などをあらわす一般名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.3.3 一般名詞＋X

(86) a 他 把 姐姐 的 男朋友 打 了。
彼 把 お姉さん の ボーイフレンド 殴る た
(彼はお姉さんのボーイフレンドを殴った。)

b ?他 把 姐姐 男朋友 打 了。
彼 把 お姉さん ボーイフレンド 殴る た
(彼はお姉さんのボーイフレンドを殴った。)

(87) 门 把 弟弟 (的) 手 挟 了。(ドアは弟の手を挟んだ。)
ドア 把 弟 の 手 挟む た

(88) 他 把 阿姨 (的) 伞 搞 坏 了。(彼はおばさんの傘を壊した。)
彼 把 おばさん の 傘 する 壊す た

(89) 小明 把 爷爷 (的) 马 牵 出 来 了。
小明 把 おじいさん の 馬 引っ張る 出る 来る た
(小明はおじいさんの馬を連れ出した。)

上記の例に見るように、前の名詞が一般名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、"的"があったほうがよいが、中心語が体の一部や物、動物をあらわす一般名詞の場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.3.4 Y＋抽象名詞

(90) 莫 把 老师 (的) 建议 当成 耳 边 风。
ない 把 先生 の アドバイス する 耳 側 風
(先生のアドバイスを聞いていないふりをするな。)

(91) 莫 把 我 (的) 注意力 分散 了。(私の集中力を分散するな。)
ない 把 私 の 集中力 分散する た

上記の例に見るように、中心語が抽象名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.3.5 まとめ

「人称代名詞＋人」の場合は、"(不) 是＋NP" の文と同じ傾向が見られた (2.1.1参照)。しかし、その他の場合、"(不) 是＋NP" の文とは逆に、"把＋NP" の文においては、圧倒的多数の場合 "的" があってもなくても成立する。しかも、口語では、"的" を伴わないケースが非常に多い。なぜこういう現象が起こったのか。一つ考えられるのは "把" の後では、修飾語と名詞のまとまりが強くなる傾向があり、"的" を用いなくても成り立つという可能性である。しかし、「固有名詞・一般名詞＋人」の場合は、"的" があったほうが自然である。なぜ「体の一部」や「物」、「動物」の場合は "的" があってもなくてもよいのに、「人」の場合だと、"的" があったほうが自然であるのか。体の一部や物、動物などが人の所有物であり、関係が深いので、"的" があってもなくてもよい。それに対して、「人」は固有名詞または一般名詞のあらわす人に所有されているわけでもなく、ただ一種の人間関係をあらわしているだけなので、"的" を伴ったほうがよい、ということが一応いえそうである。ただ、それと似た、"把＋NP" 以外の場合はどうであろうかについて考察する必要があるので、次に見る。

2.2.4 給＋NP

2.2.4.1 人称代名詞＋X

(92) a ?我 给 你 的 爷爷 写 了 一 封 信。
私 給 あなた の おじいさん 書く た 一 量詞 手紙
(私はあなたのおじいさんに手紙を書いた。)

b 我 给 你 爷爷 写 了 一 封 信。
私 給 あなた おじいさん 書く た 一 量詞 手紙
(私はあなたのおじいさんに手紙を書いた。)

(93) 我 给 我 (的) 老乡 写 了 一 封 信。
私 給 私 の 同郷人 書く た 一 量詞 手紙
(私は同郷人に手紙を書いた。)

(94) a 小明 给 他 的 情敌 写 了 一 封 信。
小明 給 彼 の 恋敵 書く た 一 量詞 手紙
(小明は彼の恋敵に手紙を書いた。)

b ?小明 给 他 情敌 写 了 一 封 信。
小明 給 彼 恋敵 書く た 一 量詞 手紙
(小明は彼の恋敵に手紙を書いた。)

上記の例を通して考察してみると、やはり "把＋NP" の場合と同じ傾向が見られる (2.2.3.1参照)。

(95) 医生 给 我 (的) 手指 上 了 药。
医者 給 私 の 指 塗る た 薬
(お医者さんは私の指に薬を塗った。)

(96) 我 给 我 (的) 笔 灌 了 墨水。(私は私のペンにインクを入れた。)
私 給 私 の ペン 注ぐ た インク

(97) 我 给 我 (的) 金鱼 换 了 水。(私は私の金魚に水を換えてやった。)
私 給 私 の 金魚 換える た 水

上記の例に見るように、前の名詞が人称代名詞で、中心語が体の一部や物、動物などをあらわす一般名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.4.2 固有名詞＋X

(98) a 我 给 小明 的 女朋友 泡 了 一 杯 茶。
私 給 小明 の ガールフレンド 浸す た 一 量詞 茶
(私は小明のガールフレンドにお茶を入れた。)

b ?我 给 小明 女朋友 泡 了 一 杯 茶。
私 給 小明 ガールフレンド 浸す た 一 量詞 茶
(私は小明のガールフレンドにお茶を入れた。)

(99) 医生 给 小明 (的) 心脏 做 了 手术。
医者 給 小明 の 心臓 する た 手術
(お医者さんは小明の心臓に手術をした。)

(100) 她 给 小明 (的) 皮鞋 打 了 油。
彼女 給 小明 の 革靴 塗る た 靴クリーム
(彼女は小明の革靴に靴クリームを塗った。)

(101) 我 给 小明 (的) 牛 喂 了 饲料。
私 給 小明 の 牛 食べさせる た 飼料
(私は小明の牛に飼料を食べさせた。)

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、"的"があったほうがよく (cf. 2.2.3.5)、中心語が体の一部や物、動物をあらわす一般名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.4.3 一般名詞＋X

(102) a 妈妈 给 爸爸 的 朋友 泡 了 一 杯 茶。
お母さん 給 お父さん の 友達 浸す た 一 量詞 茶
(お母さんはお父さんの友達にお茶を入れた。)

b ?妈妈 给 爸爸 朋友 泡 了 一 杯 茶。
お母さん 給 お父さん 友達 浸す た 一 量詞 茶
(お母さんはお父さんの友達にお茶を入れた。)

(103) 他 给 那 个 人 (的) 腰 做 了 按摩。
彼 給 あの 量詞 人 の 腰 する た マッサージ
(彼はあの人の腰をマッサージした。)

(104) 他 给 同学 (的) 车 加 了 油。
彼 給 同級生 の 車 加える た ガソリン
(彼は同級生の車にガソリンを入れた。)

(105) 我 给 爷爷 (的) 牛 喂 了 饲料。
私 給 おじいさん の 牛 食べさせる た 飼料
(私はおじいさんの牛に飼料を食べさせた。)

上記の例に見るように、前の名詞が一般名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、"的"があったほうがよい（cf. 2.2.3.5)。中心語が体の一部や物、動物をあらわす一般名詞の場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.4.4 まとめ

"给＋NP"の文の例をまとめると、"把＋NP"の文と似て、前の名詞が人称代名詞あるいは固有名詞、一般名詞で、中心語が体の一部や物、動物などをあらわす一般名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。前の名詞が固有名詞あるいは一般名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、"的"があったほうがよい。また、「人称代名詞＋人」の場合、"把＋NP"の文と同様な結果が見られた（2.2.3.1参照)。

2.2.5 在＋NP

2.2.5.1 人称代名詞＋X

(106) a ?在 我 的 爸爸 看 来, 我 永远 是 个 小伢。
在 私 の お父さん 見る 来る 私 永遠 です 量詞 子供
(私のお父さんから見れば、私はいつまでも子供です。)

b 在 我 爸爸 看 来, 我 永远 是 个 小伢。
在 私 お父さん 見る 来る 私 永遠 です 量詞 子供
(私のお父さんから見れば、私はいつまでも子供です。)

(107) 在 我 (的) 老师 看 来, 我 永远 是 个 小伢。
在 私 の 先生 見る 来る 私 永遠 です 量詞 子供
(私の先生から見れば、私はいつまでも子供です。)

(108) a 在 我 的 竞争 对手 看 来, 我 不 可能 赢。
在 私 の 競争 相手 見る 来る 私 不 可能 勝つ
(私の競争相手から見れば、私が勝つのは不可能だ。)

b ?在 我 竞争 对手 看 来, 我 不 可能 赢。
在 私 競争 相手 見る 来る 私 不 可能 勝つ
(私の競争相手から見れば、私が勝つのは不可能だ。)

上記の例において、やはり"把＋NP"、"给＋NP"の「人称代名詞＋人」の場合と同じ傾向が見られる。

(109) 他 活 在 我们 (的) 心 中。(彼は我々の心の中に生きている。)
彼 生きる 在 我々 の 心 中

(110) 我 在 我 (的) 书 上 做 笔记。 (私は本にメモをする。)
私 在 私 の 本 上 する メモ

(111) 爷爷 要 我 骑 在 他 (的) 牛 背 上。

おじいさん させる 私 跨る 在 彼 の 牛 背 上
(おじいさんは私に彼の牛の背に跨がせた。)

上記の例に見るように、前の名詞が人称代名詞で、中心語が体の一部や物、動物などをあらわす一般名詞である場合も、"的" があってもなくてもよい。

2.2.5.2 固有名詞＋X

(112) a 在 小明 的 老板 看 来, 他 是 个 人才。
在 小明 の ボス 見る 来る 彼 です 量詞 人材
(小明のボスから見れば、彼は人材です。)

b ?在 小明 老板 看 来, 他 是 个 人才。
在 小明 ボス 見る 来る 彼 です 量詞 人材
(小明のボスから見れば、彼は人材です。)

(113) 她 用 手指 在 小明 (的) 背 上 写 字。
彼女 用いる 指 在 小明 の 背 上 書く 文字
(彼女は指で小明の背中で字を書く。)

(114) 我 在 小明 (的) 枕头 底下 发现 了 一 本 书。
私 在 小明 の 枕 下 見つける た 一 量詞 本
(私は小明の枕の下で一冊の本を見つけた。)

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、やはり "的" があったほうがよい。中心語が体の一部や物をあらわす一般名詞の場合、"的" があってもなくてもよい。

2.2.5.3 一般名詞＋X

(115) a 在 哥哥 的 对手 看 来, 哥哥 不 可能 赢。
在 兄 の ライバル 見る 来る 兄 不 可能 勝つ
(兄のライバルから見れば、兄が勝つのは不可能だ。)

b ?在 哥哥 对手 看 来, 哥哥 不 可能 赢。
在 兄 ライバル 見る 来る 兄 不 可能 勝つ
(兄のライバルから見れば、兄が勝つのは不可能だ。)

(116) 我 用 手指 在 弟弟 (的) 背 上 写 字。
私 用いる 指 在 弟 の 背 上 書く 文字
(私は指で弟の背中で字を書く。)

(117) 她 在 老师 (的) 书 里头 放 了 一 张 书签。
彼女 在 先生 の 本 中 置く た 一 量詞 しおり
(彼女は先生の本に一枚のしおりを置いた。)

上記の例に見るように、前の名詞が一般名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、やはり "的" があったほうがよい。中心語が体の一部や物をあらわす一般名詞の場合、"的" があってもなくてもよい。

2.2.5.4 まとめ

"在＋NP"の文においての考察をまとめると、やはりほとんどの場合は"的"があってもなくてもよい。また、「人称代名詞＋人」の場合、"把＋NP"、"给＋NP"などの文と同様な傾向が見られた。

2.2.6 从＋NP

2.2.6.1 人称代名詞＋X

(118) a ?小明 从 他 的 奶奶 跟前 溜 走 了。
小明 从 彼 の おばあさん 前 逃げる 去る た
(小明は彼のおばあさんの前から逃げ去った。)

b 小明 从 他 奶奶 跟前 溜 走 了。
小明 从 彼 おばあさん 前 逃げる 去る た
(小明は彼のおばあさんの前から逃げ去った。)

(119) 小明 从 他 (的) 老师 跟前 溜 走 了。
小明 从 彼 の 先生 前 逃げる 去る た
(小明は彼の先生の前から逃げ去った。)

(120) a 小明 从 他 的 仇人 跟前 溜 走 了。
小明 从 彼 の 仇 前 逃げる 去る た
(小明は彼の仇の前から逃げ去った。)

b ?小明 从 他 仇人 跟前 溜 走 了。
小明 从 彼 仇 前 逃げる 去る た
(小明は彼の仇の前から逃げ去った。)

上記の例において、やはり"把＋NP"などの「人称代名詞＋人」の場合と同様な結果が見られる。

(121) 眼镜 从 我 (的) 鼻子 高头 滑 下 来 了。
眼鏡 从 私 の 鼻 上 滑る 落ちる 来る た
(眼鏡は私の鼻から滑り落ちた。)

(122) 我 从 我 (的) 床 上 滚 下 来 了。
私 从 私 の ベッド 上 転がる 落ちる 来る た
(私は私のベッドから転げ落ちてきた。)

上記の例に見るように、前の名詞が人称代名詞で、中心語が体の一部や物などをあらわす一般名詞である場合も、やはり"的"があってもなくてもよい。

2.2.6.2 固有名詞＋X

(123) a 我 从 小明 的 女朋友 跟前 走 过 去 了。
私 从 小明 の ガールフレンド 前 歩く 通る 行く た
(私は小明のガールフレンドの前を通った。)

b ?我 从 小明 女朋友 跟前 走 过 去 了。
私 从 小明 ガールフレンド 前 歩く 通る 行く た

(私は小明のガールフレンドの前を通った。)

(124) 一 只 虫子 从 小明 (的) 脚 高头 爬 上 来 了。
一 量詞 虫 从 小明 の 足 上 這う 上がる 来る た
(一匹の虫が小明の足から這い上がってきた。)

(125) 书签 从 小明 (的) 书 里头 掉 出 来 了。
しおり 从 小明 の 本 から 落ちる 出る 来る た
(しおりは小明の本から落ちてきた。)

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞で、中心語が人をあらわす一般名詞の場合、やはり"的"があったほうがよい。中心語が体の一部や物をあらわす一般名詞の場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.6.3 一般名詞＋X

(126) a 我 从 同学 的 哥哥 跟前 走 过 去 了。
私 从 同級生 の お兄さん 前 歩く 通る 行く た
(私は同級生のお兄さんの前を通った。)

b ?我 从 同学 哥哥 跟前 走 过 去 了。
私 从 同級生 お兄さん 前 歩く 通る 行く た
(私は同級生のお兄さんの前を通った。)

(127) 一 只 虫子 从 同学 (的) 脚 高头 爬 上 来 了。
一 量詞 虫 从 同級生 の 足 上 這う 上がる 来る た
(一匹の虫が同級生の足から這い上がってきた。)

(128) 书签 从 同学 (的) 书 里头 掉 出 来 了。
しおり 从 同級生 の 本 中 落ちる 出る 来る た
(しおりは小明の本の中から落ちてきた。)

上記の例に見るように、前の名詞が一般名詞の場合も、中心語が人をあらわす一般名詞であれば、やはり"的"があったほうがよく、体の一部や物をあらわす一般名詞であれば、"的"があったほうがよい。

2.2.6.4 まとめ

"从＋NP"の文においては、やはりほぼすべての場合で、"的"があってもなくてもよい。「人称代名詞＋人」の場合も、"的"を伴うか否かについて、"给＋NP"、"在＋NP"などの文と同様な結果が見られた。

2.2.7 被＋NP

2.2.7.1 人称代名詞＋X

(129) a ?小明 被 他 的 妈妈 骂 了 一 顿。
小明 被 彼 の お母さん 叱る た 一 量詞
(小明は彼のお母さんに叱られた。)

b 小明 被 他 妈妈 骂 了 一 顿。
小明 被 彼 お母さん 叱る た 一 量詞
(小明は彼のお母さんに叱られた。)

(130) 小明 被 他 (的) 老板 骂 了 一 顿。(小明は彼のボスに叱られた。)
小明 被 彼 の ボス 叱る た 一 量詞

(131) a 小明 被 他 的 死对头 打 了。(小明は彼の仇に殴られた。)
小明 被 彼 の 仇 殴る た
b ?小明 被 他 死对头 打 了。(小明は彼の仇に殴られた。)
小明 被 彼 仇 殴る た

上記の例では、やはり"把+NP"などの「人称代名詞+人」の場合と同様な結果が見られる。

(132) 小明 的 脸 被 我 (的) 头 撞 了。
小明 の 顔 被 私 の 頭 ぶつかる た
(小明の顔が私の頭にぶつかった。)

(133) 小明 被 我 (的) 自行车 闯 了。(小明は私の自転車にぶつかった。)
小明 被 私 の 自転車 ぶつかる た

(134) 小明 被 我 (的) 狗子 咬 了。 (小明は私の犬に咬まれた。)
小明 被 私 の 犬 咬む た

上記の例に見るように、前の名詞が人称代名詞で、中心語が体の一部や物、動物をあらわす一般名詞である場合、"的"があってもなくてもよい。

2.2.7.2 固有名詞+X

(135) a 他 被 小明 的 对头 打 了。 (彼は小明の敵に殴られた。)
彼 被 小明 の 敵 殴る た
b ?他 被 小明 对头 打 了。 (彼は小明の敵に殴られた。)
彼 被 小明 敵 殴る た

(136) 我 的 脚 被 小明 (的) 脚 踩 了。(私の足は小明の足に踏まれた。)
私 の 足 被 小明 の 足 踏む た

(137) 他 被 小明 (的) 车 闯 了。 (彼は小明の車にぶつかった。)
彼 被 小明 の 車 ぶつかる た

(138) 他 被 小明 (的) 狗子 咬 了。 (彼は小明の犬に咬まれた。)
彼 被 小明 の 犬 咬む た

上記の例に見るように、前の名詞が固有名詞の場合も、中心語が人をあらわす一般名詞であれば、やはり"的"があったほうがよく、体の一部や物、動物をあらわす一般名詞であれば、"的"があってもなくてもよい。

2.2.7.3 一般名詞+X

(139) a 他 被 同学 的 妈妈 骂 了 一 顿。
彼 被 同級生 の お母さん 叱る た 一 量詞

(彼は同級生のお母さんに叱られた。)

b ?他 被 同学 妈妈 骂 了 一 顿。

彼 被 同級生 お母さん 叱る た 一 量詞

(彼は同級生のお母さんに叱られた。)

(140) 我 的 脚 被 朋友 (的) 脚 踩 了。(私の足は友達の足に踏まれた。)

私 の 足 被 友達 の 足 踏む た

(141) 他 被 同学 (的) 车 闯 了。

彼 被 同級生 の 車 ぶつかる た

(彼は同級生の車にぶつかった。)

(142) 他 被 同学 (的) 狗子 咬 了。(彼は同級生の犬に咬まれた。)

彼 被 同級生 の 犬 咬む た

前の名詞が一般名詞の場合は、固有名詞の場合と同じ傾向が見られる。

2.2.7.4 まとめ

"被 + NP" の文において、ほとんどの場合は "的" があってもなくてもよい。また、「人称代名詞 + 人」の場合、やはり、"在 + NP"、"从 + NP" などの文と同じ傾向が見られる。

おわりに

本稿は、中国語(武漢方言)において、名詞句をつなぐ "的" の使用不使用についてフレーズレベルと文レベルから考察した。筆者はまずある子供が絵を描く時あるいは作文を書く時に付けるタイトルのようなものをフレーズと定義した。この定義に基づいた考察の結果としては、フレーズレベルでほぼすべての場合で、"的" を用いなければならない。

文レベルでは、NP が主語である文と NP が目的語である文とを分けて、NP が目的語である文においては、また "(不) 是 + NP"、"動詞 + NP"、"把 + NP"、"给 + NP"、"在 + NP"、"从 + NP"、"被 + NP" という七つの構文に分けて、"的" を伴うか否かについて考察を行った。すべての文においては、「人称代名詞 + 人」の場合、「人」が親族であれば、"的" を用いないほうがよいが、親族以外の人で、普通の人間関係にある人であれば、"的" があってもなくてよく、まったく親しくない人である場合は "的" を用いたほうがよい。NP が主語である文において、多くの場合は "的" があってもなくてもよいが、"的" の使用不使用によって、意味の違いが出てくる。

また、"(不) 是 + NP"、"動詞 + NP" の文においては、多くの場合、"的" を用いなければならない。それに対して、"把 + NP"、"给 + NP"、"在 + NP"、"从 + NP"、"被 + NP" の文においては、多くの場合、"的" があってもなくてもよい。こういう現象が起こったのは、NP が "把"、"给"、"在"、"从"、"被" が前に立つことによって、内部の結びつきが強められ、"的" がなくてもよいということによるであろう。

極めて大まかにいえば、「A の B」をあらわすのに、A のあらわすものと B のあらわすものに「所有関係」が感じられやすい時、また、文脈の中で(例えば、"把" の直後などで)両名詞の間の結びつきが強められているような時には、"的" があらわれないことが多いようである。

本稿では、二番目の NP に多様なものが立ちうるものを調べるため、前の NP を人をあらわす NP に

限った。前のNPが人でなく、物をあらわすの場合、"的"のあらわれないものが"的"の「省略」なのか、複合名詞になってしまっているのか不明な場合があり、議論を複雑にするので、本論文では検討を省略した。

本稿は書きながら調べ調べながら書くという方法でできあがった。このような執筆方法を可能にされた湯川恭敏先生に心より感謝申し上げたい。

注

1）朱德熙（1982）や吕叔湘（1980）、勝川（2001）などは、「人称代名詞＋親族名称」である場合、"的"を用いないのが一般的であるということを指摘している。そして、"我哥哥"（私の兄）や"他父亲"（彼の父親）のようなフレーズレベルの例が挙がっている。しかし、筆者は"我哥哥"（私の兄）や"他父亲"（彼の父親）のような表現形式が文の中にしか成立しないと主張する。

2）杉村博文1997参照。

3）文脈によっては、「固有名詞＋親族名詞」という表現形式が"的"を用いずに所有関係をあらわす場合がある。例えば、"小明叔叔来了，你看到小明冒？"（小明のおじさん来たよ。小明を見かけませんでした？）という文脈において、"小明叔叔"は"小明のおじさん"しかありえないわけである。

4）"（不）是＋NP"において、「人称代名詞＋親族名詞」の場合、親族を紹介する以外の場合もあらわしうる。例えば、"他是我（的）爸爸，我清楚得很。"（彼は私のお父さんだから、彼のことがよく分かる。）という文は、発話者が自分の父親を他人に紹介する時ではなく、自分と父親の関係、いわゆる「所有関係」を強調する時に用いられる文である。この場合、"的"を用いても用いなくてもよい。ただし、"的"を用いない場合は人称代名詞の発音が普通より長くて強い。

5）例えば、"我们学校"は"我们"が"学校"の属性を規定しているため、"哪个学校？"（どの学校？）のような疑問文に対する答えとして用いられる。一方、"我们的学校"のような「所有関係」を主張する表現形式は、所有先を明確に問う"哪个的学校？"（誰の学校？）のような疑問文に対する答えとして用いられるであろう。

6）例えば、"同意小明意见的请举手"（小明の意見を賛成する人は手を挙げてください）という文においても、"同意小明意见的"が「的フレーズ」であるため、本来"小明"と"意见"の間に置くべきである"的"が置かれたら、かえって不自然になる。

参考文献

勝川裕子　2001「"我的妈妈"と"我妈妈"の分析」『多元文化』第3期　pp. 39－51。
吕叔湘　1980『現代汉语八百字』北京：商务印书馆。
史有为　1999「"的"字三辨」『現代中国語研究論集』中国書店。
杉村博文　1997「名詞性連体修飾語と構造助詞"的"」『中国語学論文集』東方書店。
――　2001「"我妹妹"和"我的妹妹"的位置」『現代中国語研究』第2期　pp. 58－60。
朱德熙　1982『语法讲义』北京：商务印书馆。

The Connective Particle "De" in the Wuhan Dialect of Chinese

XU Hui

In the Wuhan Dialect of Chinese, in some cases, "de" must be used to connect two nouns. In other cases, however, it is possible, or more natural, to connect them without "de".

This paper is intended to examine conditions which influence the use or non-use of the connective particle "de", in the case of phrases and sentences. As the usage of "de" in the Wuhan dialect is almost the same with that in the Mandarin Chinese except for the pronunciation aspect, the author also takes the usage of "de" in the Mandarine Chinese into consideration.